

紹介子

この一篇は、かの獨逸の文豪、フリードリッヒ・ヘッセルの自叙傳の中「わが幼時」の部分であります。文學上は云ふ迄もございませんが、私共子供の相手を致して居りますものにとつて如何にも巧みな子供の描寫に共鳴する所が多いと思ひますので、茲に拙譯ながら、皆様と共に此の面白さを味ひたいと思ひます。(譯者)

私が生れた時、私の父は小さな家を持つて居た。

小庭がそれに接いてゐて、よく實る梨の樹や其他の果樹も二三本植えてあつた。家は三つに分れてゐてその中一番居心地のよい廣い室を、私達か占領したが日當りのよいのが何より結構であつた。あとの二つは人に貸した。その中で向ひの方は左官屋のクラウスオール並びに、僱傭の妻君が住み、庭をまわつて裏道にあたる方は、勞働者の家族が借りて居た。同居人と云つても、私が知つて以來少しも變らないし、また私達を可愛がつてくれる事から云つても父や母と同じ様であつたので、私達子供はこの人達が

初めからこの家に付きものである様に思つて居た。

私の家の庭は他の家の庭で取り圍まれて居た、一方の側には、剽近者の指物屋の庭がある、この人は私をよく揄擲つたものだが其後、自殺をした、何故あんな死に方をしたのか、私には今だに分らない。嘗つてごく小さい頃に私は高慢ちやくれた、顔をして垣根越しに「隣の伯父さん、お寒うございます」と云つたこの指物屋はこれを面白がつてわけても夏の暑い日などには、この言葉を幾度も繰り返して飽くる所を知らない程であつた。

指物屋の庭に接いて坊さんの庭があつた。これはまた高い板圍ひがしてあつて、子供には見下す事が出来ない。しかし、裂け目や割れ目から覗く事は充分出來た、わけても春時、見知らぬ美しい花が咲く頃この庭園には澤山の花があつたので、覗き見するのが誠に嬉しかつた。唯坊さんが此方をチツト覗いていやしいかと思つては震えて怖がつた。この坊さ

んには私達子供は無限の崇敬を拂つてゐた。と云ふのは一方に彼の眞面目な峻嚴な、憂鬱病にかかつた様な顔付きとあの冷やかな眼付きのためにもまた他方にはその身分また敬意を起させる様なその職務のためであつたらうと思はれる——。例へばよく棺が私の家の側を通り過ぎる時に幾時もこの坊さんが棺側についてゐるので——。この坊さんのよくやつた事だが時々子供達の遊んでゐる方をチツト見るすると私達はすぐに遊びを罷めてしまつて、コソ／＼と家に這入つてもふのが常であつた。

も一方の側には古い井戸があつて私の家の庭と隣の庭との堺になつてゐた。樹の枝に蔭されて、實際に深く、また木製の屋根はボロ／＼で青黒く苔蒸してゐるこの井戸、私は考へる度びにゾツとする。

また、私の庭は牛乳屋の庭に接いてゐた。——この牛乳屋は牝牛を持つてゐると云ふ譯で近所近邊の親分株になつてゐたが。——そしてまた靴皮匠オカシヤの庭に堺してゐた、この靴皮匠と云ふのはあらゆる人間の中で最も不機嫌な男で、私の母はよくかう云つてゐた、あの人は今、一人の人間を喰ひつくして更にもう一人の人の頭を掴まへやうとしてゐる様な顔を

してゐる」と。

以上が私の幼年時代に呼吸した雰圍氣である。これは決して狭いとは思はれないと思ふ、何故なら當時の印象は尙今日に迄も及んでゐるから。今でも尙あの機嫌のよい指物屋が垣根越しに私を見てゐる。今でも尙あの意地の悪い坊さんが板圍ひの向ふから私を睨んでゐる。今でも尙私は、あの人樽の様に肥満した牛乳屋の亭主が、懷中無一文ではないと云ふ印にポケットに両手を入れて表口の所に立つてゐるのを見る。今でも尙私はあの靴皮匠が黄疽の様な黄色い顔をして、子供の頬が赤いと云つては腹を立て、わけても彼が世辭笑ひをした時の、一段と物凄いや顔を思ひ出す。今でも尙私は、太い梨の木の下で、小さなベンチに腰かけてその木陰に涼みながら、陽の照る梢から、虫にくわれたために早熟した實が落ちて來はせぬかと待ち設ける氣持になる。今でも尙あの井戸、今にも屋根が落ちそうで釘付けにしなければならぬと思ふあの井戸が、一種の凄いやな感じを吹き込んで來る。

私の父は外では快活で打解けるが、宅では非常に真面目な性質であつた。自宅では滅多に口をきかないのでなかく分らなかつたが、世間ではお伽噺をするのが上手いと云ふ評判であつた。父は私達が笑つても、また何か聴いても五月蠅がつた。之に反して彼はまた永い冬の夕べには黄昏時に讚美歌を歌つたり、又、俗謡などを私達と一所になつて歌ふのが大好きであつた。

私の母は誠に氣立てのよい、一寸性急な人であつた。あの銀杏をむいた様な眼は、輝きがあり、人をホロリとさせる様な柔しさをもつてゐた。何かにひどく感動すると幾時でもすぐに泣き出すのが常であつた。私は母の秘藏で、二つ年下の弟は父の秘藏であつた。その理由は、私が母に似、弟が父に似てゐる様に思はれたからで。しかし（後に分つた事だが）實際は似てはゐなかつた。

両親は家内に食物のある間は誠にお互に平和に暮してゐた。それが不足すると——夏には滅多にないが多くは冬、仕事がなくなる時によく起るが——時々ハラ／＼する様な場面が演ぜられる。

私は種々の想出の中で、この場面ほど怖しいと思

つた事は少ない。それ故、私はこの時の事を何にも云はずに過ぎる事はどうも出来ない。私のごく幼少の頃の出来事の中、私の想ひ出すこの場面の一番初めのもものは、恐らく二才でない迄も三才の時に起たらしく思はれる。私はこの話をしたからとて、私が両親に對しての神聖な記憶を穢す事にはなるまい、何故なら、かうした場面を何か特別な事でもあるかの様に見る人があるとすれば、その人は、未だ、下層社會の何たるかを解せぬ人であるから。

私の父は仕事に出かけると大方はその出先で飯を食へさせて貰ふ。その時は、私達は自宅で、世間なみに、普通の時刻に晝飯を食べる事が出来る。が、時として父がその晝飯を日給の中から差引かれる事がある。すると私達の晝飯は抜きになつてしまふ、たゞ飢え凌ぎに十二時頃、ごく簡単なバターパン位を啣つて置く。小さな所帯では一日二食で辛棒する事は安價な遣り繰りであつた。かう云ふ日には私の母は自分の欲望を充たすためよりも、子供達を喜ばせるためにポツタラ焼を焼いて呉れた。私達は非常な食欲でそれを食べつくした、その時に「今晚お父さんが、何たべた？」と聞きても云つてはいけないよ」と

云ひ含められる。父が歸つて来る。私達はもう寢床に入られてグッスリねてゐる。何時も父の歸る頃にはまだ私達は起きてゐるので、今夜は妙だと思つたのか、それとも家のきまり（父が歸る迄子は起きてゐると云ふ）を犯したと思つたのか、其邊は私はよくは知らないが兎に角、父は私を起して、私をあやして、抱きあげて、そして聞いた「お前、今日何を食へたか」と「ポツタラ焼!!」と私はねぼけて答へた。そこで父は母を叱る、母は何とも云はずに父の夕飯の仕度をするしかし「よくも喋舌つたね、覺えておいでよ」と云ふ眼付きで私を睨んだ。翌日になつて、また父が留守になると母はだまつて鞭でビシヤ／＼打つた、これは彼女の言葉を借りて云へば身にしみる様な教訓であつた。他の時に、母はまた嚴格に「正直を愛せよ」と教へ込んだ。よく人は矛盾が悪い結果を來たすだろうと考へるかもしれないぬ、しかし私のこの經驗ではそんな事はなかつたし、又、廣くかゝる心配はないだろう。何故なら、人生は矛盾だらけで、人の本性はこれに對して適合する様に出來ておるのであるから。然し實際私はも少し大きくなつてから、否或は全くしない方がよいと思ふ一つ

の經驗を幼少の時にした。と云ふのは父の望む所と母の望む所と一致しないと云ふ事であつた。

私は子供の時には餓い經驗はしなかつた（大人になつてからはよくしたが）之に反して母は甘んじて私達の食べるのを傍觀してゐなければならなかつた。そうでないと私達子供が飢えてしまふから。

三

幼年時代の一つの特長とも云ふべきは實に家畜の末に至る迄あらゆる人、あらゆる物が子供に對しては機嫌よく、親切にすると云ふ事であるこれは全く子供に向ふと「安心」と云ふ感じを得られるからでこの感じは敵の世界に（大人の世界に）一步を踏み入れればもうすぐ消えて再び歸つて來ないものである。

わけても下層社會ではこれが實際である。子供が戸口で遊んでゐると、水汲みに又は買物に向ふ側へ一寸出掛ける隣の女中が、きつと花の一輪位は呉れる。果物賣の女は、籠の中から、梨とか櫻桃とかを一つ位は投げて呉れる。それ所ではない、有福な旦那手合は小錢を呉れる、子供はそれで上等な白麵麩を自分で買ふ事が出来る。運送屋は子供の傍を通

りが、りにはワザ／＼鞭をヒュー／＼ならせて面白がらせる門附けの男は二つ三つ面白い曲をきかせて呉れる。何にもかう云ふ事をしない人でも、少くとも、子供に會ふと「名は何と云ふ」「年は幾つだ」「位は聞く、さもなくばニッコリ笑顔を見せて呉れる。

——尤も子供は小ザツバリとして居なければいけないが——。かうした親切は私にも私の弟にも豊かに與へられた。取分け私の家の同居人——特に所謂隣り人で——この人達は嚴格な父としてよりも殆んど母の如くに大切に思はれた。

夏には、この人達は仕事があるから少しも私達の遊び相手になつて呉れない。けれども夏は私達の方でも朝から晩まで、起きるから寝る迄、花園で蝶々追ひかけたりして遊び相手は充分あつたので、困りはせなかつたし、冬時、雨の日や雪の日に、子供は家に閉ぢ込められてしまふ時、この人達が全く私達のいゝ遊び相手になつて呉れた。日傭人のおかみさん、——名はメタと云つて巨人の様な、やゝ前屈みの身體で、舊約聖書の中にある人の様な、黄銅色の顔をしてゐる。私はこの顔を思ひ出す度に後に見たあのローマ法王のジクステニシユの會堂にあるミ

ケルアンジセロ作のクマ人種の神巫の事があり／＼と眼の前に浮んで來るが——メタさんはいつとも、よく頭に赤い布を捲きつけて、なか／＼暮れやらぬ冬の夕方に庭をぐるりとまはつて私達の所へやつて來て、火燈し頭まで遊んでゐた。(註、北歐の冬は日が暮れてから薄明りの時が長く續く。)この時にメタさんは魔女の話とか、幽霊の話などをしてくれたが、全く上手で、誰から聴くよりもこの人の口から云はれると實に感じ入る様になつた。私達はまたこんな事も聞いた、あのハルツ連山の高峰ブロックス山の事、地獄の日曜日の事、くだらなく見える箒の柄も物凄じ意味を持つ事、さては眞黒な煙突の穴(これは何處の家にもあるものだが私の家にもあつた)には怪しからぬ仕方で地獄の親分が大勢その乾分を養つてゐるのだなどと云ふ事、全くこの事は私達子供に恐怖心を吹き込んだものであつた。

また實際私はあの評判のわるい磨夫の娘の話の印象はいまだにのこつてゐる。それはこの娘が夜な／＼猫に怪けたが、しかし、とう／＼自分の悪い行は適面の罰を受けた、と云ふのはこの怪けた猫がある時、夜の散歩をしてゐた時粉塵場の若者に迂散臭

く思はれて、とう／＼この若者のために前足を切られた、そして翌日この娘は手のない、血だらけの赤い腕をして寢床にねてゐたと云ふ事でこの話を聞き初めはどうなる事かと思つたが罰せられたと聞いてやつと安心した。

燈火がつく頃になると、私達は隣りのオール伯父の所へ出掛けて行つたが、その室はメタの室の空気がより實際はるかに居心地がよかつた。隣人オールは幾時も機嫌がよい男で氣に入らぬ事がないでもないのに不愉快氣な顔を私は一度も見つた事がなかつた。

お腹が空いてゐても、否彼にはそれ以上重大事らしく見える煙草のない時でも、私達が行くといつでも何かしら歌つたり、口笛吹いたりまた躍つて見せたりして呉れた、そしてあのいつも機嫌のよい、否いつも満足そうな顔は今も尙私の眼のまへに空の星の様に輝いて見える——實際オールの顔と云へば目立つて真赤な鼻があつて、私の母の話によると、私がある時オールの膝に抱かれて搖られてゐて、ふと見上げた時、その鼻を大變欲しがつたと云ふ事であるが。またオールは何時でも先の尖つた、晒した縁無し帽子を被つてゐた。星の顔に見えるると云ふ形容

は當らぬ様だが、しかし私には實際そう立派に思はれるので——。

嘗つては、オールも土地でたゞ一人の左官の親分で、二三十人の乾分の職人をつかつてゐた時であつたがその職人の多くは、後に思ひ上つて親分の様な氣になり、そしてオールの仕事を奪つてしまつた。

當時よく噂にも上つた様に、彼とても、もしくは、あんなに度々球戯場へ通はず、もし好きな酒を控えたなら氣樂な餘生を送る様に貯金も出来たであらうに。けれども、オールの様に不幸福の日を忍ぶ人に對してはまた都合のよかつた頃にたゞ無頓着に享樂したとて咎めるにも及ばない。私はオールの事を考へ出すとホロリとしない譯には行かない、それはまた私には無理もない事なので、彼は嘗つてある「歳の市の」贈物として、私と私の弟とに太鼓やラツバの玩具を呉れた、それをオールは玩具屋から大骨折りで借りて來たので、この僅か許りの借金も彼の貧乏なために幾時迄も拂へず、私が大分大きくなつて生意氣盛りの頃、彼と並んでその玩具屋の前を通つた時に、まだ催促を受けて居つた。子供を樂しませる事にかけては彼はなかく／＼の事を案出した

實際また子供を喜ばせるには氣立さへよければ充分であるからして、この點で彼は成功したのであつた私達にとつて一番うれしかつた事は彼が私達と一緒に机のまはりに腰かけて、一本の白墨を手にとつて水車、家、いろいろの動物その外何やかや畫いて呉れる時であつた。その頃彼はよく滑稽な思ひ付きをしたが、今も何だか私の耳にはそれが響いて來る様な氣がする。

どんな時でも、私達が仲間入りをしないとオールは決して本當に樂しむ事はしなかつた。ことに日曜日毎に、朝説教をききに行つて歸つて來ると緩くりと晝飯を初める。この時には彼が盛であつた當時を偲ぶために所謂油の様に澄んだウイスキーをのみ、煙草をふかす。このウイスキーは指拔ゆびひきに一杯づゝ私達子供も無理にのまされる私達が呑まないとオールも味がない、つまらないと云ふので。勿論この飲料は子供には適當のものではなかつたが、しかし分量が極く僅かなので健康に害がある様な事はなかつた所が私の父はこの秘密を知つたのでこの日曜日の宴會に行つていけないと禁じてしまつた。これはオールにとつて誠に氣の毒な事であつたが、私は、また

この樂しい時はそれでも止めはせなかつたと云ふ事を附け加へて置かなければならない。唯其れ以來はこの宴會をごくヒツソリとやつて、且オールは「この宴會の後には道で父さんに遭はない様にする事だ、キッスをされる機會をつくつてはいけないよ、すぐやつてる事がわかるからね」と切に勧めた。實は父にさとられたのも父が私の唇の所へキッスをしたためであつた。

折々、オールの家には冬になるとまだ未婚の二人の兄弟がやつて來た、この人達は多分は田舎にブラついてゐて無用の長物らしいが、オールは三人をいつも機嫌よくこの家に迎へて、どんな小さなパン片でもありさへすればきつと二人に分け與へたが、何にもない時には何とも仕方がなかつた。春が來て仕事が見つかるか、又は食べる物なくて飢えそうになると二人は出て行つた。この人達が居ると私達子供には何だかお祭の様に嬉しかつた、と云ふのはこの住家すまがに一つの新しい世界が作られたからで。森での胃驗談やまた彼等がやつときりぬけたと云ふ追刺の話人殺しの話また、彼等が淋しい森中の居酒屋で食べたと云ふ生肝いんぎまの血の滴るのを油で揚げたものの話

または彼等が最後に人間の手の指足の指を井の底に見出したと主張する、かうした話を聞かせて呉れた。オールの妻は人生の重荷(生活の問題)をさすがに夫ほど軽くは考へてゐないので、この氣焰萬丈の食客を大層嫌つた、また、この食客は豚の脂肪が煙突の所にブラ下さつてゐる間は(註、脂肪を乾燥させるために斯く爲す)食物のある間は——出て行かないと云ふ事も知つてゐたから。でも私の母の所へ来て心行く斗りに愚痴をこぼし胸襟をひらいては、先づ慰められてゐた。それで私達に對しては誠に機嫌よく、夏時、都合さへよければ、屢々、赤や白の草苺を呉れた。それとても彼女がある吝嗇な女友達から泣く様にして貰つたものであつた。それでも私はこの人の餘り近くへ行かない様にしてゐた、と云ふのは外でもない、傍へ行くと必要あるごとに私の爪を缺んでくれるこれは全く私には神經の末稍までクスグツタイ感じを伴ふので非常に嫌ひであつたから。

またこの妻君オールは聖書を熱心に讀んだ、そして私が自分一人でよむ様になるゾット前にこの人からこの氣味のわるい本の最初の強い、否恐しい印象を受けたのであつた。それはあの舊約にあるエレミ

ヤの恐しい場所を讀んで聞かせてくれた即ちこの怒れる豫言者が、「母親が非常に怒つたその時には自分の子供達を殺してそれを食べてしまふであらう」と豫言したといふ文句であつた。私は今も思ひ出すがこれを聞いた時には全くこの句がゾットする様な恐れを吹き込んだ、勿論この時私はこの話が過去にあつた事が、未來に起る事か、或は遠くエルサレムに關する事か、又は私の村のウエツセルブレンに就ての事か、そんな事は少しも解らなかつた。が、しかし兎も角も當時私自身は子供であり、又一人の母を持つてゐたので。

日頃受持つてゐる子供を眼の前にチラ附かせながら此の「わが幼時」を讀んで居りました時、此處に書いてある子供は、國も時代も凡べての風俗習慣制度も異つた事情のもとにあると云ふ事も忘れて、私はたゞ興味を覺えました。ヘツベル一流の皮肉に、滑稽に、噴飯させられながらも此處に含まれてゐる眞理に深い共鳴を感じました。(紹介手)